

実習生の保育内容についての理解 — 5 領域に焦点を当てて —

石川 洋子*

Student Teachers' Understanding of Early Childhood Education and Care: Focusing on Health, Human Relationships, Environments, Language, and Expression

Hiroko ISHIKAWA

要旨 実習生の保育内容についての理解の検討のため、印象に残った保育実践とそれが子どもに育てているものについて、養護と教育に分け記述してもらった。いずれも自立心を高めるという項目が高かったが、教育においては、協同性や表現性・創造性、相手の心に気づくこと、道徳性や思考力なども挙げられていた。子どもの育ちとして挙げられた項目数を5領域間で比較すると、思考力を含む環境の領域がやや低かった。実習生にとり、遊びや生活という実践の中で、5領域の育ち全般を読みとる難しさを感じられた。しかし、挙げられた育ちの個数の平均を学年別に比較すると、3年生よりも4年生の方に多く、4年生は、実践内容に5つの領域の意義を読み取りながら、子どもの言葉や気持ちに着目して、内面を考えながら多くの育ちを読み取っていた。これらの結果を見ると、実習などの経験を授業で振り返り、それらを自身の言葉で文字化してみることは、実習生の保育内容理解と意識化、そして定着化にも効果があるのではないかと考えられる。

キーワード：実習生 保育内容 5領域 幼児教育

I 研究目的

保育者養成における質の向上が求められている。2017年には、幼稚園教諭の養成において課程認定の改正が行われ、5領域を核として、子どもの育ちを育む専門性の向上が目指されている。

本学の保育者養成においても、さまざまな授業や実習の事前事後指導などにおいて、実習生の力を向上させる努力を行ってきた。しかし、保育現場で何が行われ、その実践の中で、子どもの何を育てようとしているのかなど、実践に対する分析力や実習生の実践力向上は、なかなか高めることは難しい。

実習生において、実践の分析力を身につける難しさの理由の一つは、「遊び」や「生活」という子どもの一日の流れの中で、5領域がどう位置づいているかの理解の難しさである。遊びを単に遊びと位置づけたり、遊びの表面的な目的への理解だけにとどまっていて、より深い育ちへの理解まで至っていないのではないかと思うのである。ここに、保育者養成における「保育内容」授業のあり方と学生への教育の方法が大きな課題となる。

保育者養成における保育内容の指導に関して、源¹⁾らは、5領域と保育内容総論の担当教員の専門分野の実態調査を行っている。そこから、研究者としての専門分野と保育学・幼児教育学の専

* いしかわ ひろこ 文教大学教育学部心理教育課程

門という複数の専門分野を併せ持つ者が増えてきたこと、教科教育学に関連する分野を専門とする研究者が保育内容を担当することが増えてきたことなどを報告している。そして、各領域ごとの研究成果を園全体でどう組み立てていくか、各領域を総合的に関連づけて保育内容や方法を検討する「保育内容総論」の確立が必要であるとしている。

朴²⁾は、小学校教員養成課程の学生を対象に、「保育内容総論」の講義の中の乳幼児と保育に関する記述について、テキストマイニング分析を行い、学生たちが授業が進むに従い、子どもや保育に対する考え方に変化があることを述べ、授業の工夫や配慮の可能性を示した。

佐藤³⁾らは、保育者の専門性を高めるために、子どもや保育の理論的理解とそれに基づいて行う実践、実践の省察や他者との議論を通じた理解の修正・更新を折り重ねる必要性を指摘した。そして、保育の全体的な構造を理解することを目的に、授業の後半において「夏祭り」を企画・準備して子どもたちを招待するという実践を行った。学生には、子どもの内面の理解、知識の体得、発達に応じた援助、個に応じた援助、状況に応じた対応、安全への配慮、個と集団への対応、教材研究や環境構成の大切さなどへの理解が得られており、学習の振り返りの効果や学びの抽象化が得られたとの結論を出している。

清水⁴⁾は、学生が保育の内容について総合的に理解できる方法を模索し、イメージしながら理解することを目指し、積み木という遊びの実際と振り返りを通じて、遊びと5領域との関わりなどへの気づきを報告している。

そこで本研究では、実習生に対して、5領域をベースとした保育内容への理解を主に自由記述を通して調査することを企図した。調査表に記述しながら実習を振り返り文字化することで、実践内容の意味を意識化し定着化することも期待した。

II 研究方法

実習生の保育内容の理解の検討と実習を振り返

り、その意味の意識化、定着化を図るため、質問紙調査を実施した。

質問は、印象に残った現場の保育者の保育実践と、そこで子どもに育てているものについて、養護と教育に分け、記述してもらった(複数回答)。

研究対象は、本学教育学部心理教育課程幼児心理教育コース3年生、4年生88名である。経験した実習園、ボランティア園(複数回答)は、表3の通りである。

表1 研究対象の人数

男性	女性	合計
8.0 (7)	92.0 (81)	100.0 (88)

表2 研究対象の学年

3年生	4年生	合計
44.3 (39)	55.7 (49)	100.0 (88)

表3 経験した園種

	% (人数)
公立幼稚園	4.5 (4)
私立幼稚園	93.2 (82)
公立保育所	47.7 (42)
私立保育所	52.3 (46)
私立認定こども園	3.4 (3)
合計	100.0 (88)

III 結果と考察

1 印象に残った実践

(1) 養護に関する印象に残った実践

研究対象により記載された印象に残った現場の保育者の保育実践と、そこで子どもに育てているものについて、養護と教育に分け、分類した(複数回答)。

養護に関して印象に残った実践は、図1のとおりである。3年生、4年生ともに、健康や生活習慣に関するものが多く、とくに食育についての記

述が多かった。3年生39名中13件、4年生49名中7件の記載があった。3年生に比して4年生に多かった印象に残った実践は、言葉かけであった。言葉かけの重要性を感じ取ったものと思われる。

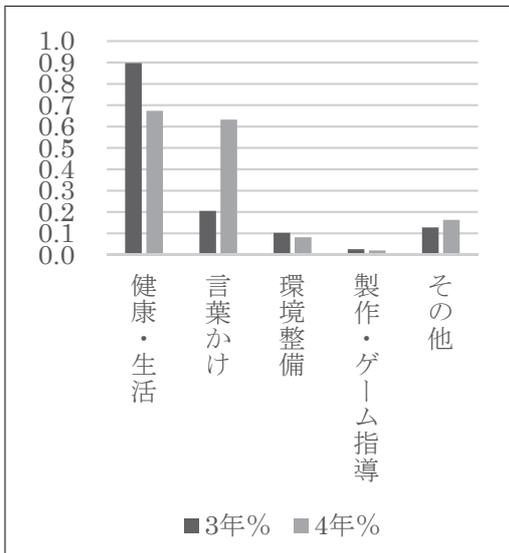


図1 養護に関する印象に残った実践

(2) 教育に関する印象に残った実践

教育に関して印象に残った実践は、図2のとおりである。3年生、4年生ともに、製作やゲーム指導など主活動の実践に関するものが多く挙げられていた。

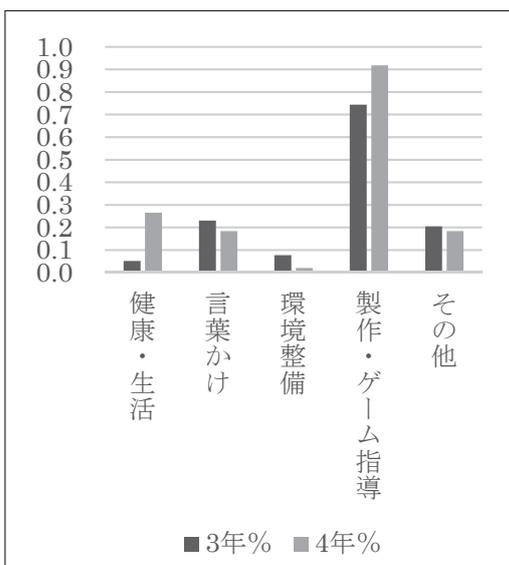


図2 教育に関する印象に残った実践

2 子どもに育てているもの

次に、印象に残った実践で、子どもに育てていると思われるものについて自由に記述してもらった。

実習生に記載された項目は多岐にわたっていたが、5領域に焦点を当て、記載されたものから、養護に関するもの、教育に関するもの共に、以下のような19項目に分けた。

1. 体—身体発達，体を動かす，戸外で遊ぶ，活動に親しむなど
2. 健康・安全—健康，安全，生活リズム，食育に関するもの
3. 生活習慣—基本的な生活習慣形成に関するもの
4. 安心感—子どもの安心感や保育者への信頼感形成に関するもの
5. 自立心—自分で考え自分で行動する，自主性，達成感，自己に対する自信や自己肯定感形成に関するもの
6. 相手の心—相手の心に気づく，相手を理解する，思いやり，一緒に活動する楽しさを味わうなど
7. 異年齢—異年齢児との関わりを通してそれぞれの子どもに育てるもの
8. 協同性—協同性や協調性を育てる，共通の目的をもつ，集団やクラス運営に関するもの
9. 道徳性—いい悪い，ルールを理解，自己を振り返ったり自分の気持ちの調整に関するもの
10. 物の使い方—はさみや遊具など，物の使い方に関するもの
11. 社会性—自己の役割や社会を意識させることに関するもの
12. 思考力—概念形成，イメージ力形成，集中力や考えをよりよいものにするなど
13. 自然・生命—自然や生命尊重に関するもの
14. 数量・図形・文字—数や図形，文字に関するもの
15. 言葉—言葉による伝え合い，聞く力や挨拶など
16. 表現性・創造性—表現力や創造性形成に関するもの

るもの

- 17. 英語・手話など—英語や手話, パソコンなど
- 18. 発達の遅れへの対応—発達の遅れや気になる子への対応などに関するもの
- 19. 小学校へ向けて—小学校を意識した事項

(1) 養護と教育の実践で子どもに育てているもの

図3は、養護と教育に関する実践で、子どもに育てているとして複数回答で挙げられたものを、全体の人数における割合からみた結果である。

「5自立心を高める」項目は、養護、教育のいずれにおいても高く、実習生に強く意識されていた。また、その他養護に関するものでは、健康や安全、生活習慣に関するもの、安心感などが挙げ

られていた。

教育に関するものでは、自立心の他に、協同性や表現性・創造性、相手の心に気づくこと、道徳性や思考力などが挙げられていた。

育ちとして挙げられた項目を5領域間で比較すると、思考力を含む環境の領域がやや低いことがわかる。

養護であれ教育であれ、教育者は、子どもの育ちは5領域を中心にさまざまに意識しながら保育を行っている。しかし、実習生にとり、遊びや生活という言葉でくくられる実践の中に5領域全般の育ちを読みとる難しさが感じられた結果であった。

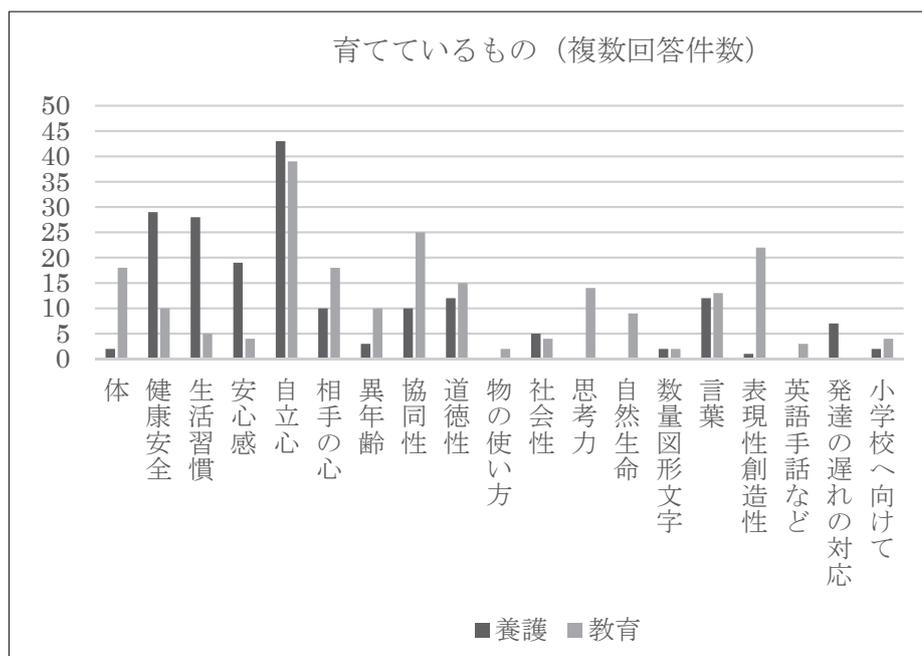


図3 子どもに育てているもの

(2) 教育に関する実践で育てているものと学年差

教育に関する実践で子どもに育てているもの(複数回答)について、学年差を比較検討した。

表4は、学年別に、子どもに育てているものについて挙げられた個数の平均値を比較したものである。4年生の方に、挙げられた項目数が多いという結果であった(表4 $p < .001$)。

表4 子どもに育てているものとして挙げられた項目数と学年差

	平均値	N	SD	F値
3年生	1.95	39	.724	20.881 ***
4年生	2.88	49	1.092	

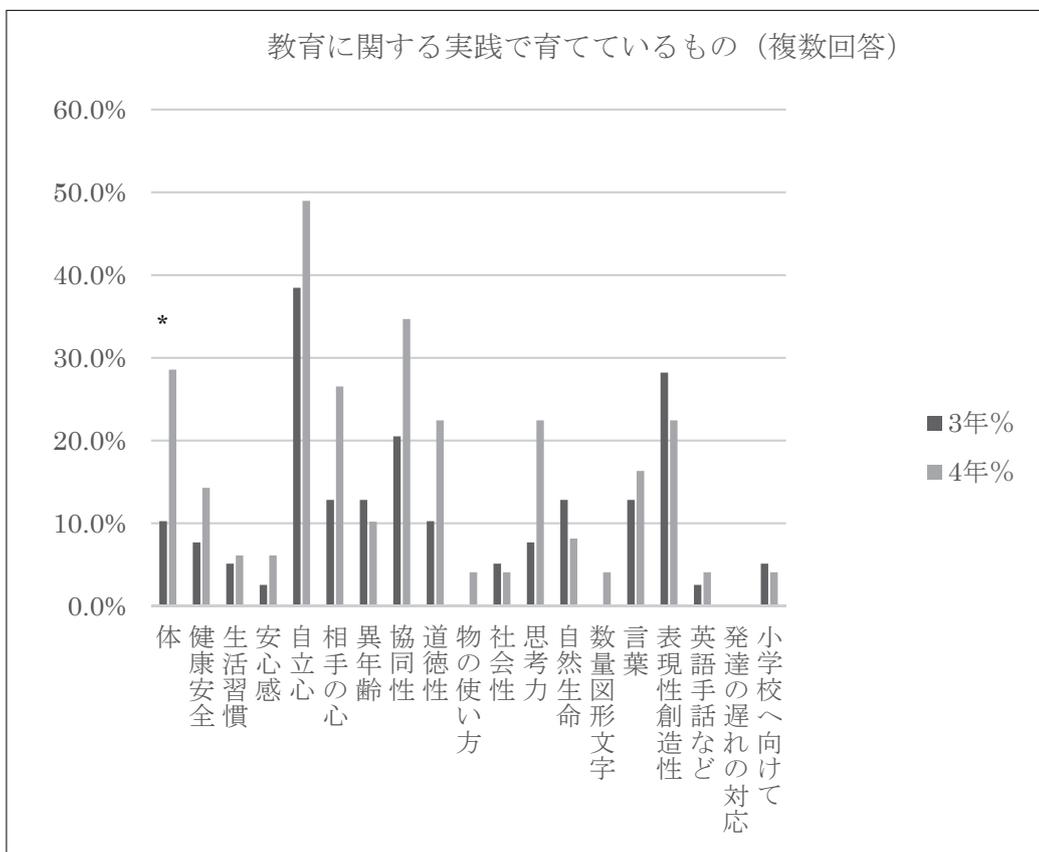
*** $p < .001$

実習をより多くこなし、実習事前事後指導などを多く受講した4年生の方が、保育実践の意味をより多くの視点から見るができるようになっていた。

教育に関する実践で子どもに育てているものについて、その具体的内容を5領域の視点から学年別に比較したものが図4である。これは、3年生、4年生それぞれ的人数に対する割合から見たものであるが、全体を見ると、3年生、4年生共に、自立心や相手の心に気づくこと、協同性、道

徳性といった人間関係の領域に関する育ちを多く読み取っていた。

これを学年別に見ると、自立心や協同性、身体を作ること、相手の心に気づくこと、道徳性や思考力などが、3年生に比して4年生に多く挙げられていた。4年生の方が、子どもに育てているものについて、より多く回答しており、また育ちを5領域にわたり広く意識されていることがわかる。



* p < .05

図4 教育に関する実践で子どもに育てているものの学年差

(3) 教育に関する実践で育てている内容

上記の結果から、3年生よりも4年生の方が、1つの遊びでも子どもに育てているものを複数の視点から見ていること、5領域にわたり意識されていることがわかったが、その内容を質の点から見ていきたい。

表5、表6は、3年生と4年生の印象に残った実践事例とそこで育つものについての記述例である。3年生の多くは、実践内容に即して5領域に関連づけながら記載していた。実践の意義を探ろうという意識も見てとれる。一方、4年生は、実践内容に5領域の意義を読み取りながら、子ども

の言葉や気持ちに着目し、内面を考えながらその育ちも読み取っている。学年が上がることでこれらの結果を見ると、実習などの経験を振り返

り、そのことを文字化し意識化することで、より定着が図れるのではないかと考えられた。

表5 子どもに育てているもの（3年生）

実践例と子どもに育てているもの
<ul style="list-style-type: none"> ・お店屋さんごっこの品物の製作で、子どもに問いかけながら指導していた。 →自分で考え工夫し、表現できる力。果物や野菜などに興味・関心を持つこと。 ・お手玉遊びをしていた子どものところに入り、先生がそれを頭に掛けて歩いていた。 →バランス感覚や遊びを広げる発想。 ・ペロペロキャンディーの製作。 →クレヨンの使い方。クレヨンを使う嬉しさ。イメージを表現する楽しさ。

表6 子どもに育てているもの（4年生）

実践例と子どもに育てているもの
<ul style="list-style-type: none"> ・1人10回ずつ飛ぶ大縄跳び。 →身体諸機能の発達。仲間意識の芽生えの形成。数量への興味関心。達成感。 ・なわとびを使って、釣りなどテーマに応じた遊び。 →見立てる力。イメージを豊かに表現する力。「長靴が釣れた」などイメージ力や創造力。 ・ゲームに負けた子に対する声かけ実践。 →自分で気持ちを切り替えること。他の子の思いへの理解。褒められることで育つ意欲。

IV まとめ

実習生の保育内容の理解の検討と、実習を振り返り文字化することで、実践内容の意味を意識化し定着化することを企図し、質問紙調査を実施した。印象に残った保育者の保育実践とそこで子どもに育てているものについて、養護と教育に分け、記述してもらった。

養護に関して印象に残った実践は、健康や生活習慣に関するもの、教育に関しては、制作やゲーム指導など主活動に関するものであった。

その実践で、子どもに育てていると思われるものについて記述してもらい、19項目に分けたところ、養護と教育のいずれにおいても「自立心を高める」項目が高かった。

その他教育に関しては、協同性や表現性・創造性、相手の心に気づくこと、道徳性や思考力などが挙げられていた。子どもの育ちとして挙げられた項目を5領域間で比較すると、思考力を含む環境の領域がやや低いことがわかった。実習生にとり、遊びや生活という言葉でくられる実践の中

に5領域の育ちを読みとる難しさが感じられた。

子どもに育てているものとして挙げられた項目の個数の平均値を学年で比較すると、4年生の方に多いという結果であった。

また内容では、全体として、自立心や相手の心、協同性、道徳性といった人間関係の領域に関する育ちが多かったが、学年別に見ると、自立心や協同性、身体を作ること、相手の心に気づくこと、道徳性や思考力などが、4年生に多く挙げられていた。4年生の方が、子どもに育てているものについて、より多く回答しており、また育ちを5領域にわたり広く意識されていることがわかった。

4年生は、実践内容に5領域の意義を読み取りながらも、子どもの言葉や気持ちに着目し、内面を考えながらその育ちを読み取っていた。これらの結果を見ると、実習などの経験や授業での振り返り、それらを自身の言葉で文字化してみることは、実習生の保育内容理解と意識化、定着化に効果があるといえるのではないかと考える。

参考文献

文部科学省, 幼稚園教育要領, 2017

厚生労働省, 保育所保育指針, 2017

謝辞

本調査にご協力いただきました皆様に厚く御礼を申し上げます。

-
- 1) 源証香・小谷宣路「保育内容」研究のあり方に関する一考察, 埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要, 13, 9-15, 2014
 - 2) 朴信永「保育内容総論」をとおして学生は何を学ぶか, 椛山女学園大学教育学部紀要, 10, 83-93, 2017
 - 3) 佐藤暁子・八代陽子・山本双葉・我妻留美, 「保育内容総論」における大学2年生のグループ学習の成果と課題, 東京家政大学研究紀要, 56 (1), 9-19, 2016
 - 4) 清水桂子, 保育者養成における遊びの実際から理解へと導く「保育内容総論」の授業展開と一考察, 北翔大学短期大学部研究紀要, 53, 71-78, 2015

